

「基地のことを語るの
は、複雑よね。民謡歌手の
私がこんなふうに語るの
は政治的だ」といってね、後ろ
指さす人もいるんですけど。
目の前で今、起きている
ことですから、やっぱり言
っておかなくちゃって思っ
て……。自宅のある沖縄県
読谷村でインタビュニーに応
じた古謝さんは、トレード
マークの長い髪をぐるぐる
と丸めると、言葉を慎重に
運びながら語り始めた。
三線を弾きながらウチナ
ーグチ（沖縄方言）で歌っ

古謝さんは、沖縄音楽を全
国に広めた大御所だ。幼い
ときより琉球時代から伝わ
る謡曲や三線を学び、一九
九〇年代にはポップスと融
合させた女性ボーカルグル
ープ「ネーネーズ」の初代
リーダーとして活躍。九六
年からソロになり、ジャン
ルを超えた音楽家や演劇家
とも一緒に活動してきた。

政治的だとめられるのを
避け、以前なら話さなかっ
た基地問題などを語るよう
になったのは、二十一年
前。初孫の誕生が大きいか
つたという。うるま市の二十
歳の女性が元海兵隊の男に
レイプされて殺された事件
に抗議する二年前の県民大
会では、三線を手に代表作
の「重箱」を冒頭に歌っ
た。

「天からぬ恵み 受きて
い此ぬ世界に生まりたる
産子……」
「軍神はね、お母さんが
わが子をあやしながら」ど
んなことがあっても、おま
えを守りよ……という気持
ちを歌ったの。どんな風が
吹いてもおまえの風よけに
なるよって。でもね、娘を
無残に殺されてしまった親
御さんはそれができなかった。
どんなに悔しかったか
ね」。そして「けれど」と
古謝さんは言葉を継いだ。

「事件はじくなった彼女
だけじゃなく、基地のある
沖縄ではこれまでも無残に
あつて命を落としたりした人
が数え切れないほどいる
の。男もね、女もね……」
子守歌を追憶歌として歌
った古謝さんに、那覇市の
運動場に集まった約六万五
千人の人々は「基地はいら
ない」のボードを掲げ、
「フィー、フィー、フィー、
フィー」と熱い指笛で応えた。
大会に出席した翁長氏は、
日米地位協定の改定と普天
間飛行場の県外移設の必要
を力説している。

古謝さんの米軍基地への
思いには複雑なものがあっ
た。生まれは本島中部部の
嘉手納町。東アジア最大級
の米軍嘉手納基地のフェン
スに囲まれた町。父はその
基地の中で働いていた。古
謝さんが三歳のときに、父
が軍用車にはねられ二十歳
の若さで亡くなった。母が
代わって基地内で働いた。
「母だってまだ二十八歳だ
ったけど、そうやって三人
の子を育てたんですよ」
だから古謝さんは長い
間、基地があったかと思っ
ていた。沖縄戦を体験し
た母が、日本人を恨んでい
たことも影響した。

9.30 沖縄知事選

民謡歌手 古謝美佐子さんの思い

元宮野浦市長の佐喜富厚氏、三 員良 公明 維新 希望推
薦 と故翁長雄志知事の後を継ぐ前衆院議員玉城デニー氏
二人による事実上の一騎打ちとなった二十日投票の沖
縄県知事選は、政府が弾引を進める米軍辺野古の新基地建設
などを争点とし、沖縄の将来をかけた天下分け目の最終決戦と
なる。賛成か反対かで分断されていく県民たち。その姿を胸を
痛めながら見つめる沖縄の民謡歌手、古謝美佐子さん。何が知
事選に込めた願いとは。

古謝美佐子



米軍基地なくしたい

「母は何度も言っ
たね。戦争のときに日本軍
は、沖縄人を防空壕から追
い出したり、スパイだと疑
って切ったりした。日本人
は口うまいから近づくなっ
て。アメリカ力は沖縄を助け
た。日本は悪だ」と
でも「今なら分かって」と
いう。「基地によって食べ
させてもらったというのは
米軍統治下の戦後の沖縄の
状況がそうさせたんだっ
て。戦争さえなかったら
ね、私たちの家族もつまし
も穏やかな生活をしてい
たはず。今でも「沖縄は基
地があるから食べていける
んでしょ」なんていう人が
いると、腹立たしい。那覇
の新都市も北谷も、軍用地
を返還された土地は新しく
築いてるんですけど」